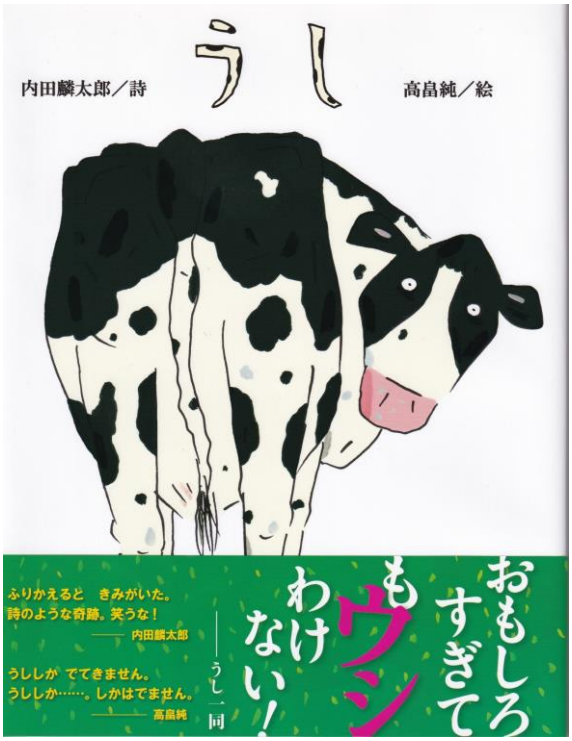
豊庄だより

第 648 号 2021 年1月 18 日

福岡市早良区南庄２－２６－１３
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長　西尾　達

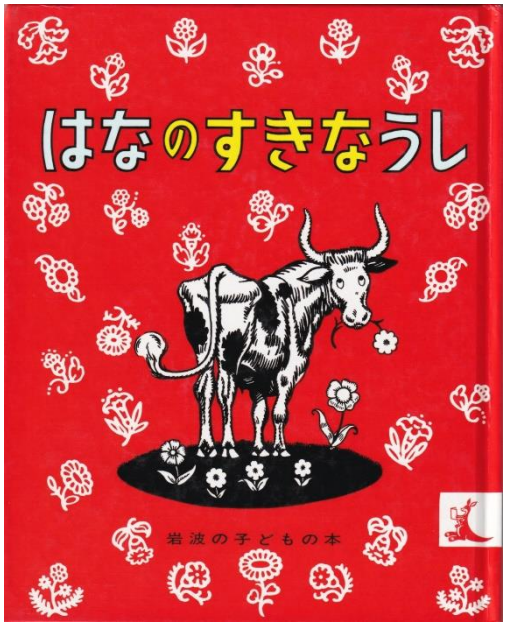


本屋さんで面白い本を見つけました。本の題名は、『うし』（アリス館）。丑（うし）年ということで、お客の目につくところに置かれていました。いきなり登場するのは、牛の後ろ姿。そして、こちら（うしろ）を見ています。ページをめくると、再び、牛の姿。そして、やはり同じように後ろを見ています。「なんだ、これは？」と思い、更にページをめくると、またまたふりかえる牛の姿。開くページは牛だらけ。「一体どうなるのか？」と思って更に読みすすめると、突然やってくるとんでもない結末。何が出てくるかは、読んでのお楽しみ。

内田麟太郎さんが詩を書き、高畠純さんの絵と組み合わさって、最高に楽しい絵本の出来上がり。「一体、この本、何が言いたいの？」なんて、つまらない質問はやめましょう。

この本が発行されたのは 2017 年。これまでどれくらい売れているのか知りませんが、丑（うし）年の今年になって、日の目を見たのではないかと勝手に想像しています。（※この本は、本屋さんで立ち読みをしただけで、購入していませんが、あのとき買っとけばよかったと後悔しています。近々買います！）

牛の本をもう 1 冊紹介します。『はなのすきなうし』（岩波書店）です。スペインのある牧場で暮らす牛のフェルジナンド（本の中では、「ふぇるじなんど」と平仮名で書かれています）は、小さな頃から花が大好き。他の牛たちはマドリードの闘牛場で勇敢に闘うことを夢見ているのに、フェルジナンドだけはひとり花の匂いを静かにかいでいました。 そんなある日、闘牛を探しに牛買いたちがやってきたときのこと。フェルジナンドはいつものように木の下でのんびり花の匂いを楽しんでいましたが、偶然、お尻を蜂に刺されて大暴れ。この光景を見た牛買いたちは勇ましい牛を見つけたと大喜びし、フェルジナンドをマドリードの闘牛場へと連れて行きます。しかし、勇ましく戦うことを望まれる中、フェルジナンドは観客席の女性が帽子に飾った花の香にうっとりし、闘おうとしません。使い物にならんと牧場に返されたフェルジナンドは、再び静かに花の香をかぐ幸せな日々を送ります。この本が書かれたのは 1936 年、スペイン内戦の真っ只中です。政治的にいろいろと利用されたと本の解説に載っていました。翻訳され日本に紹介されたのは 1954 年です。私が生まれた年です。何年生のときだったか思い出せませんが、父が買ってくれました。以来、愛読しています。



最後に牛の話題でもう一つ。牛を 3 つ使った「犇（はん）」という字をご存知ですか？犇（ひし）めくと読み、「人が大勢集まって騒ぎ立てること」という意味があります。「3 密」を避けようというコロナ禍の中では、ちょっと困った漢字です。※「犇（はん）」については、「春秋」（2021 年 1 月 8 日付西日本新聞朝刊）を、2 冊の絵本についても、それぞれのブックレビューを参考にしました。